



明治大学

黒耀石研究センター ニューズレター

Center for Obsidian and Lithic Studies News Letter

No.6, March 2016

地質学と考古学の垣根を越えた世界

隅田 祥光

長崎大学教育学部・明治大学黒耀石研究センター員

私が考古学にかかわる仕事を始めたのは2011年の春に大阪市立大学から明治大学黒耀石研究センターに赴任してからのことでした。当時、30代半ばを迎え、ふと、自分の現状を直視してみると、非常に中途半端な自分が存在している。また、それを打開するきっかけをつかみたいとあがくが、それもなかなか見つからないという現実に苛まれていました。このような時、縁あって黒耀石研究センターの特別嘱託職員に採用され（2012年4月からは特任講師に任用）、小野センター長、当時の会田副センター長、そして、同僚の橋詰さんに出会い考古学との連携研究を開始しました。

連携と言っても学問分野が異なると、まさに「畑が違う」というのが現実で、物事の考え方や手法も大きく異なります。さらに、考古学と私が学んできた地質学には、文系と理系という大きな垣根も存在します。このような状況の中で、自分の物事の考え方のみで、赴任当初、突っ走っていた自分は、振り返ってみれば、かなりのご迷惑様で、それを小野センター長や、当時の納谷学長は、長い目で、辛抱強く見守ってくれていたような気がします。

黒耀石研究センターへ赴任後、まもなく、広原遺跡の発掘が始まり、今まで商売道具として手にしていた岩石ハンマーを、移植ゴテに持ち替え、考古学者やその卵の方々と、汗水を垂らしながら働いているうちに、サイエンスという大きな枠組みの中における、考古学分野と共通した物事の考え方を、幾つか見出すことができるようになりました。また、フィールドがベースという大きな共通点を見出すことができました。



写真1 国立ウクライナ科学アカデミー考古学研究所にて

目次

- ◆ 地質学と考古学の垣根を越えた世界 1
隅田祥光
- ◆ オーストリア・北チロル地方の中石器時代遺跡群と高山
景観の巡検調査 2
小野 昭
- ◆ XIX INQUA Congress 2015 巡検実施報告 2
島田和高
- ◆ 上田市立丸子中学校職場体験学習の受け入れ 3
土屋美穂
- ◆ 黒耀石研究センター講演会『気候変動に人類はどのよう
に適応したか？—ヒト—資源環境系の人類誌—』 4
島田和高
- ◆ 紀要『資源環境と人類』第6号刊行のお知らせ 4
- ◆ 編集後記

その中で、自分が求められている仕事、その仕事から得られるであろう成果を、現実的なものとして考えることができるようになり、その方法を考古学者と話しあうようになりました。そのいききっかけが、黒耀石研究センターで開催された国際会議（2011年と2012年）や国際若手ワークショップ（2014年）、黒耀石研究センターの山田さんが中心となって行ったウクライナのトランスカルパチアの調査（2013年）でした。

現在の学問分野は、非常に細分化していく一方、分野間の融合や連携による新たな分野の開拓が盛んに行われています。その中で、自分の育った環境と違う分野と連携し、本当の意味での新しい研究成果を得るには、お互いの領域を侵さないという考え方と真反対にある、お互いの学問の「真髄」を体感することも必要かと思えます。このような意味において、私は黒耀石研究センターで、その真髄を3年間ではありますが、少しでも体感した数少ない地質学者であると自負しております。

現在、私は九州の長崎に住んでいますが、つい長和での朝の澄んだ空気、八ヶ岳や霧ヶ峰などの山々、自宅の庭の山菜を思い出します。また、羽田町長ほか、町の皆様には、色々とお世話になったこと。そして、長和に移り住んで始めたスキーも2級を取得するまでになったこと。長和に住んでいたころの思い出は語りつくせないところです。この場をお借りして、皆様に感謝を申し上げます。また、この原稿を執筆する機会を設けていただいた、本ニューズレターの編集者の方々にも感謝いたします。

オーストリア・北チロル地方の中石器時代遺跡群と 高山景観の巡検調査

小野 昭

更新世から完新世への自然環境の変動の中で人類はどのように適応し、それが考古学的に把握し得る証拠としてどのように残されているのだろうか。2011年以來、長野県小県郡長和町の広原遺跡群をさまざまな地域事例と比較する必要を感じ、山岳地に立地して更新世/完新世の森林限界の垂直移動の結果を反映していると思われる遺跡との比較を模索してきた。

こうした中、アルプスの早期中石器時代のウラーフェルゼン Ullafelsen 遺跡調査の結果が大部なモノグラフとして刊行された (Schäfer ed. 2011)。編者のインスブルック大学シェーファー教授の計らいで、2015年8月に3日間、北チロルの重要な中石器時代遺跡の巡検調査が実現した。調査には筆者の他に島田和高、橋詰 潤、吉田明弘の3氏が参加した。調査は科学研究費基盤研究 (B)「ヒト-資源環境系から見る更新世/完新世初頭の石材獲得活動の国際比較」(2015-2017年度, 課題番号:15H03268 研究代表者:小野 昭)によった。



写真1 中央右寄りの崖状の高まり上面がウラーフェルゼン遺跡

調査は8月19日から25日までの実質4日間で、20日がインスブルック大学でウラーフェルゼン遺跡の石器の見学。以後3日間、2000m級の高地にある完新世初頭、早期中石器時代の遺跡の巡検と地形景観の観察をおこなった。21日(金)はインスブルック市の北にある北石灰岩アルプのシュライムスザッテル遺跡他、22日(土)はインスブルック市の東南にあるフォッチャー溪谷のウラーフェルゼン遺跡、カーゼルアルムシュローフェン遺跡、23日(日)はオーバーベルク溪谷のフランツ・ゼン・ヒュッテ近くの2遺跡を訪ねた。

シェーファー教授らは、人類の居住が困難で稀であると思われる高地の遺跡の実態の解明と、遺構の詳細な分析から場所利用の様相を復元し、石材分析からアルプスを南北に越える最大で直線距離200キロにおよぶ広域の人類の移動と交流などについて問題を提起している。短期日であったが天候にも恵まれ、教授の案内と議論に大いに啓発された。20日から22日まで同行して当該地域の地質・岩石の案内をしていただいたステファーン・ベル

トゥラ博士にも感謝申し上げる。日本列島の当該時期の様相との違いも鮮明になった点があり、2017年度末までに具体的な比較の成果を出したい。



写真2 フランツ・ゼン・ヒュッテ付近の氷河擦痕

XIX INQUA Congress 2015 巡検実施報告 Mid-congress excursion 7: Prehistoric Jomon culture and the obsidian-mining sites in the Central Highlands, Nagano Prefecture 島田和高

本巡検は、名古屋国際会議場で開催された国際第四紀学連合第19回大会 (INQUA Congress 2015: 7月26日から8月2日) において Mid-congress excursions の一環として7月30日に実施した。長野県の八ヶ岳西南麓の縄文時代文化と黒曜石産地における先史黒曜石獲得活動を紹介する内容で企画した。島田和高と橋詰潤が巡検リーダーとして当日の案内を担当した。参加者は23名でスイス、ウガンダ、ロシア、アメリカ、フランス、ドイツ、メキシコ、スペイン、カナダ、中国、ケニア、アイスランド、ポーランドの各国研究者からなり、森林環境に適応した狩猟採集漁労民であった縄文人への関心の高さがうかがえた。巡検の実施にあたっては、カラー17頁のガイドブックを作成し配布した。

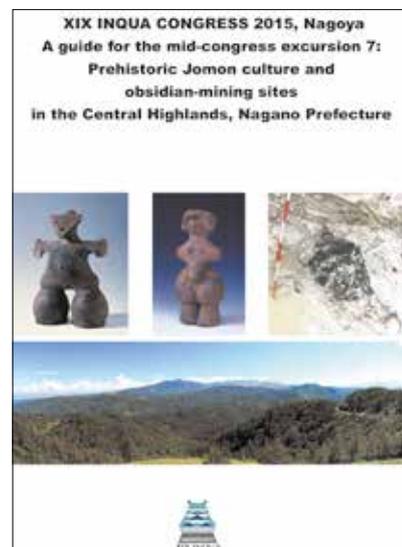


写真1 巡検ガイドブック

午前7時に名古屋国際会議場を出発した。午前11時、最初の訪問地である茅野市尖石縄文考古館では、国宝土偶「縄文ビーナス」と「仮面土偶」を中心に八ヶ岳西南麓の縄文時代遺物を山科哲学芸員の解説で見学し、博物館の敷地にある国指定史跡尖石遺跡・与助尾根遺跡を訪れた。参加者からは、縄文土器の文様のダイナミックな変遷が何を意味するのかなど多くの質問が寄せられた。



写真2 茅野市尖石縄文考古館（国宝土偶の見学）

午後1時、明治大学黒曜石研究センターでランチをとり、同センターに設置されている黒曜石理化学分析機器の説明を行った。参加者には、採取地点マップを付した北海道白滝原産地採取の黒曜石原石片を分析サンプルとして提供したが、これが存外に好評を博した。なお昼食は「峠の釜飯」としたが、器の「釜」を記念に持ち帰る参加者も多かった。

黒曜石研究センターに隣接する長和町黒曜石体験ミュージアムでは、大竹幸恵学芸員の案内で石器作り体験など児童・生徒の体験学習を視察した後、旧石器の石器製作工房や縄文採掘址など鷹山黒曜石原産地遺跡群の発掘成果の展示を見学した。

最後に山道を20分ほど登り、黒曜石研究センターと黒曜石体験ミュージアムを見下ろす標高1500mに位置する国史跡星糞峠縄文時代黒曜石採掘址群を訪れた。現地では、巡検リーダーから



写真3 国史跡星糞峠縄文黒曜石採掘址群（長和町）の巡検

1991年以降の発掘の経過と合わせて、どのように地表面に残るクレータ状の径数メートルの凹地が縄文時代の採掘活動の痕跡であると証明できたのかなどについて解説した。しかし、一時的に天候が崩れたため、案内の後半で下山した。解散場所である金山駅には午後8時半に到着した。

いずれも短時間の訪問ではあったが、エクスカージョンを通して日本列島の「縄文」と「黒曜石」について理解を深めてもらう一つの機会になったと実感することができた。本エクスカージョンの準備を含め、現地では多くの関係者にご協力を賜りました。末筆になりますが、厚くお礼を申し上げます。

上田市立丸子中学校職場体験学習の受け入れ

土屋美穂

2015年7月23日から24日にかけて黒曜石研究センターでは、橋詰 潤氏が受け入れ担当者として、長野県の上田市立丸子中学校の女生徒2名の職場体験学習を受け入れた。センターの業務に関しては、橋詰氏が考古学分野、河野秀美氏が事務および施設の保守管理、土屋美穂が理化学分野を担当して、それぞれレクチャーを行った。わずか2日間の短い期間であったが、黒曜石を題材に考古学、理化学分野にふれて、また、施設管理を通して、2人とも熱心にセンターでの業務を行った。

23日の前半は、橋詰氏担当による業務に関する研修が行われた。はじめに、スタッフ紹介、辞令が交付された。次にセンターと共同で発掘調査を行ってきた長和町（旧長門町）の黒曜石体験ミュージアムにおいて、その研究成果の普及公開活動について学んだ。次にセンターの概要説明を通してセンターに対する理解を深めた後、館内を見学した。後半は、土屋が担当した「黒曜石とは何か？」説明を行い、黒曜石に関わる火山の生成実験を行った。

24日の前半は、橋詰氏担当の考古資料の整理作業が行われた。遺跡から出土した石器の洗浄や注記、整理作業を行った。昼食後には、黒曜石体験ミュージアムにおいて、黒曜石を用いた体験学習を行った。後半は、河野氏による、XIX INQUA Congress 2015巡検の開場準備や館内の保守管理業務を行った。



写真1 職場体験学習の様子

黒耀石研究センター講演会『気候変動に人類はどう 適応したか？－ヒト－資源環境系の人類誌－』

島田和高

2015年12月19日に、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業による黒耀石研究センター講演会をグローバルフロント4021教室において開催した。講演は合わせて6本行い、参加者は115名であった。本講演会は、過去の気候変動と理化学的な黒耀石研究の概要を紹介する2本の講演で始まり、これを受け最終氷期最盛期、晩氷期そして後氷期における人類適応についての各論に当たる3本の講演に進み、そして最後に環境史と人類史の相関を理解する枠組みである人類誌（Anthropography）の考え方を紹介する総括講演で終了した。最後の質疑応答には会場から活発な質問やコメントが寄せられ、会場の狭さもあり立ち見の方も出るなかで盛況のうちに講演会を終了することができた。

【講演会内容】

主催：私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ヒト－資源環境系の歴史の変遷に基づく先史時代人類誌の構築」（2011－2015年度、研究代表者：小野 昭）

司会：及川 穰（島根大学）

内容：

「人類紀の激しい気候変動：日本の最終氷期を例として」

公文富士夫（信州大学）

「黒耀石研究が明らかにするヒトと資源」

池谷信之（沼津市文化財センター）

「最終氷期の黒耀石利用と中部高地原産地の開発」

島田和高（明治大学博物館）

「晩氷期の土器出現と動植物資源利用の変化」

橋詰 潤（明治大学黒耀石研究センター）

「縄文農耕を問う：縄文時代の気候変動と植物質食料栽培化過程の解明」

会田 進（明治大学黒耀石研究センター）

「古環境と人類：相互関係究明のポイントはどこか」

小野 昭（明治大学黒耀石研究センター）



写真1 講演会の様子

紀要『資源環境と人類』第6号刊行のお知らせ

黒耀石研究センターの紀要『資源環境と人類』第6号が、2016年3月に刊行されます。この紀要に掲載されている論文などは、センターのホームページにおいて閲覧およびPDFをダウンロードすることが出来ます。是非、ご活用ください。



編集後記

黒耀石研究センターニュースレター第6号をお届けします。今号は2015年度後半に行われた、センターでの行事やセンター員の活動、紀要刊行情報などをいち早くお知らせいたします。また、今年度でセンターが推進してきた、文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ヒト－資源環境系の歴史の変遷に基づく先史時代人類誌の構築」（略称：大型研究）が終わりを迎えます。その総括として一般向けの講演会が行われ、多くの方々に参加して頂けたこと感謝いたします。今後も、センターでは国内外を通して活動を行っていきます。その活動情報は、ホームページやFacebook（FB）において発信を行いますので、是非ご覧下さい。また、黒耀石研究センターのホームページ情報を大幅に更新しました。大型研究は2015年度で終わりとなりますが、しばらくの間は、ホームページも継続しますので、こちらもお覧頂ければ幸いです。（MT）

明治大学黒耀石研究センターニュースレター 第6号

発行日：2016年3月1日

編集：土屋美穂

発行：明治大学黒耀石研究センター

〒386-0601

長野県小県郡長和町大門3670-8

電話：0268-41-8815

URL：http://www.meiji.ac.jp/cols/

FB：https://www.facebook.com/ 明治大学黒耀石研究センター -564680010333699/

印刷：中澤印刷株式会社

〒386-0002

長野県上田市住吉1-6

電話：0268-22-0126



※当センターでは施設の固有名称として「黒耀石」の表記を使用しています。